

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2008年 夏号 7月9日発行／季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

頑張れ！ 府中のレンゲまつり

自然の厳しさを痛感

この数年間よく咲いていたレンゲの花が、今年はひどい不作になりました。私たちはこれまでの経験から、種子を9月と10月に分けて播いています。ところが、今年は1～2月の気温が平年に比べかなり低かったため（今までが暖冬気味だったのかもしれませんが）、10月に発芽した幼苗の生育が悪く、レンゲの生育にかなりムラができてしまいました。追い打ちをかけるように、アルファルファタコゾウムシが大発生し、これが決定的なダメージとなりました。この外来昆虫は1982年九州で初めて発生が確認され、カラスノエンドウ・レンゲなどマメ科の植物を好んで食害する害虫で、ほぼ全国に広がりレンゲ栽培地の岐阜県などで大問題になっています。昨年までやや息をひそめていた押立町のタコゾウムシは今年になって一気に勢力を拡大し、4月に花が咲き始めるや、見る見るうちに花葉を食い荒らしてしまいました。

レンゲ栽培だけでなく、まつりの実施もお天気に振り回されました。まつりの前日（4月18日）に強い雨が降り設営ができず、20日に延期と決めました。19日は田んぼが水浸しとなり排水と会場設営に追われましたが、お天気が回復したため会場を訪れた人も結構いて市民の方々にご迷惑をかけてしまいました。今年のレンゲまつりは自然の厳しさを痛感させられた年でした。

レンゲまつりの意義

例年600人を超える参加者が今年はその半分程度に落ち込み、不本意なまつりとなってしまいました。このあたりで、レンゲまつりを続ける意義について再確認しておきたいと思います。



第8回レンゲまつりの風景

都市化が進む中で農地が年々少なくなり、府中市でも毎年5%の農地が減少しています。その中で田んぼは特に著しく減少しており、ましてレンゲ田はほとんど見られなくなっていました。昔は春になるとあちらこちらでピンク色のレンゲの花が一面に咲き揃っていました。レンゲまつりを通して“ふるさとの原風景”を後世に残していくことも大切な意義のひとつではないかと考えています。

< 2 頁に続く >



⑭

丸坊主にされた 東八道路のユリノキ

栄町3丁目の東八道路の街路樹は現在、写真のような姿をさらけ出しています。このユリノキは今年の年初から剪定が始まり、すべて痛々しい姿に切詰められてしまいました。

都道を管理する北多摩南部建設事務所は、地元自治会、府中市からの強い要請で30年ぶりに剪定したと云います。そして「ユリノキは萌芽力が強く4～5年で元の形に戻るので、形は悪いがしばらく我慢してほしい」と付け加えました。今年中に府中市域はすべて剪定する予定のようです。

それにしても、景観は台無し。あまりにひどすぎる剪定です。市内の緑化にも深く関わっている街路樹のありかたについて考えさせられる光景です。市の緑化推進施策との整合性を図ったうえで、なおかつ景観への配慮も加え街路樹の管理を行うべきではないでしょうか。



<前頁より>

もう一つの意義として、毎回大勢の親子連れの参加者が集まり、レンゲまつりを楽しんでいます。なかには「最近では田んぼの中に入って遊ぶ機会がなく、本当に良い体験ができた」という参加者もいます。親子でレンゲの中で遊んだ経験は良い思い出となって、いつまでも心に残り、自然や農地を大切にすることを育んでいると思います。

レンゲまつりの課題と対応

レンゲまつりは8回目を迎えましたが、その間に新たな害虫が発生したり、市内のレンゲ田が大幅に減少したり、レンゲをとりまく環境は大きく変わりつつあります。レンゲまつり自体もいくつかの課題を抱え、その解決に取り組んでいるところです。

1) レンゲ栽培技術の確立

毎年変化する気象条件に耐えると同時に、アルファルファタコゾウムシの発生をできる限り抑え、しかも均一にレンゲが咲くような栽培方法を確立するのは並大抵なことではありません。

今回、全国規模で活動している「日本レンゲの会」の方々と交流することができましたので、いろいろとアドバイスをいただき研究していきたいと考えています。

特に頭が痛いのはタコゾウムシ対策です。あまりに被害が酷いので「レンゲまつり」を止める団体も出てきているという話も聞かれています。私たちはできるだけ薬剤に頼らない方法をめざしてきました。バーナーで幼虫や繭を焼いたり、段ボールのすき間で夏眠している成虫を捕殺したりして、薬に頼らない方法を模索しています。来年の準備のため5月5日に段ボールを畦に敷き詰め1ヶ月後に撤去したところ、約1,000匹の成虫(サンプル調査による推定)を捕まえました。もちろん、この程度では駆除することはできません。長年レンゲを栽培している押立の田んぼには、タコゾウムシが相当しっかりと定着していると見られるからです。レンゲまつりを継続するとすれば、来年は薬剤を併用せざるを得ないと考えています。

2) 地域に根ざしたレンゲまつりを目指す

地域との連携は、レンゲまつりを始めた当初からの課題でしたが、府中産野菜の仕入れを地元のJAや農家をお願いする程度で、それ以上進みませんでした。今回、イベントに関連する行政に働きかけ、ようやく一歩を踏み出したところです。その概要は、①ゴミ減量推進課職員による「ごみ分別・資源化・地球にやさしい3Rの呼びかけ」。②地域の学童クラブの子供たちによる「地域紹介マップ・工作物の展示」。③新押立商店会による「飲み物などの出店」と「設営資材の提供・ポスター掲示」。④南白糸台小PTAによる「ビオトープ・安全な通学路などの紹介」⑤府

中スポーツリーダー・体育指導員による「ニュースポーツバグー」の紹介」などです。

地域参加は、初めての試みであり、小規模のイベントのあつまりでしたが、それぞれ次回に向けて手ごたえを感じ取られた催しでした。これらを手がかりとして”地域に根ざしたレンゲまつり”、さらには”地域活性化”となるよう期待しています。

レンゲ栽培やめる農家増える

3) 市内のレンゲ田の保全

レンゲはもともと緑肥として栽培されてきたものですが、近年レンゲ栽培を止める農家が増え続けています。その理由はいろいろですが、①レンゲ栽培により田んぼが窒素過多となり栽培しているコシヒカリが倒伏して困る。②害虫が発生して困る(多分アルファルファタコゾウムシと思われる)③レンゲを守ってきたお年寄りが亡くなりレンゲ栽培の継続が困難となった。など大まかに3つに分けられます。

4月になると当会のホームページで臨時レンゲ田情報が流されていますが、今年は”ふるさと景観”として紹介できるレンゲ田が四谷2丁目と4丁目の2カ所となってしまいました。困ったことに、ここにもタコゾウムシが相当発生しています。害虫の被害が懸念されるレンゲ栽培をこれ以上農家にお願ひするのは難しく、レンゲ田の減少は、もはや私たちの力だけでは防ぐ手立てがなくなっています。行政は、レンゲの緑肥については市民生活部・経済観光課、まつりの開催については環境安全部・環境政策課、レンゲ田の景観については都市整備部・計画課と縦割りになっていて、残念ながら”ふるさと景観”のシンボルとしてレンゲ田を保全する動きはほとんどないように思われます。このような状況下では、そう遠くない時期に市内のレンゲ田は押立町1カ所になってしまいうことも覚悟しなければならないでしょう。

レンゲまつりの明日に向けて

今まで過去8回のレンゲまつりを支えてきた最大の協力者は、なんといっても田んぼの持ち主の戸塚勇氏です。戸塚さんは田んぼを快く開放してくださるだけでなく、自らトラックを運転して TENT や椅子・机の運搬をして頂くなど、まつりの準備に全面的なご協力をいただいています。次に、ボランティアとしてご参加いただいている講師や協力者のみなさん、並びにほとんど1年を通して害虫駆除・種まき・除草・会場設営やチラシ配りに汗を流している当会スタッフの皆さんのお陰だと思っています。

ある中学生は「・・・自然のあるまちは住んでいて気持ちがいいし、人々の交流も盛んになる。私自身そういう体験してきたので例をあげると、れんげ祭なんかそう。このお祭りは田んぼがあって初めてできるお祭りだし、実際に友達もできた。このように、自然とも人ともふれあえることができるイベントを増せば人々の自然保護に対する意識も高まり住みよいまちをつくれるというものだ」(平成18年10月開催『中学生による総合計画意見発表会』での意見)。

このような声に耳を傾け、また、レンゲまつりに参加されている市民の方々の期待に応えるためにも、困難な課題と正面から向き合いながら、都内でも数少なくなったレンゲまつりをみんなで支えていきましょう。(野口道夫)



アルファルファタコゾウムシ

左から、レンゲを食べるタコゾウムシの幼虫、繭、ダンボールのリブに隠れている成虫

[資料提供 : 竹内章、田上昌宣]

東京にレンゲ田を 保ち続けたい

日本レンゲの会事務局長 佐藤芳博

レンゲまつりの取り組みについては、全国の関連団体からも関心を寄せていただいています。その縁で「第8回レンゲまつり」には、「日本レンゲの会」から代表が参加され、初めての企画となったレンゲ田での「落語」も好評でした。

会を代表して事務局長の佐藤芳博さんからメッセージとレンゲ田を残すためのアドバイスをいただきました。

数年前、幅広い活動と手間を掛け工夫されていることを知り敬服致しておりました。レンゲまつりを中止する地域が関東地区でも増える中、活動を継続しておられる皆様方の経験と対策を全国に伝えたいとの思いで参加致しました。今年は、以前あまり被害がなかった赤い茎葉のレンゲと同じマメ科のカラスノエンドウが各地で食害に遭いました。貴会計画のアルファルファタコゾウムシ対策は、現在考えられる最良の方法だと思いますので、小生は、発芽育成について試論を述べさせていただきます。

マメ科植物は深根性で、その根に共生する根粒菌は好気性細菌で窒素固定能力を高めるために乾燥が必要です。過湿な土壌は根粒菌の繁殖を妨げレンゲの生育が悪く凍害を受けやすくなります。生育初期の約1ヶ月間、とりわけ発芽当初の10日間は浸水に対する抵抗力が特に弱いので、冠水しないよう排水対策が必要です。更に、春先に水が停滞して過湿にならないように排水溝を設置すると効果があります。田起こし後に畑に畝を作るように耕すと、水はけの水路が出来ますのでお勧めしますが、田植え前に平坦にする手間が掛かります。レンゲを初めて栽培するところや根粒菌の着生が少ないところでは、根粒菌接種の効果は大きくなります。

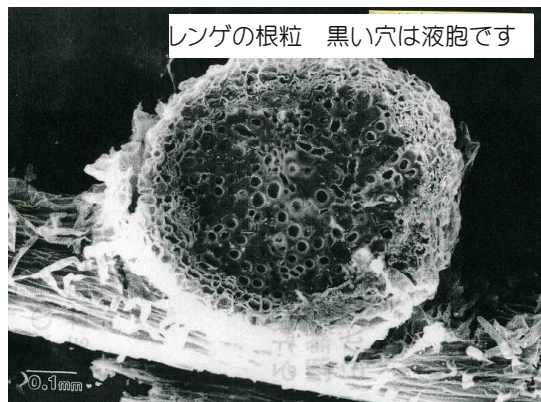
播種時の乾燥程度は田面を歩くと足指の間にわずかに土が出る位です。春に出来た種は硬く播種期の秋になると大部分は軟らかくなりますが、砂つき法によって磨傷処理を行うと発芽率が良くなります。昨年、宮城県多賀城市で田起こし直後に、ミキサーに種と砂を同量位入れて暫く回転させ傷をつけてから根粒菌をまぶし、人の手が軽く触れる位の幅に並んで播種したところ、均一になり発芽率も良く綺麗に咲きました。覆土をしなくても芽は出ますが、覆土をする場合は1～2cmが適当で、5cm以上になると出芽が悪くなります。

根粒菌に関する事例では、当会訪中団員として南京農業大学ファン教授の研究室を訪れた時、寒天で培養している根粒菌を拝見しました。それを分けていただき研究用として西アフリカのセネガル共和国に持参しレンゲ播種の前に種にまぶし育成に成功した経験があります。多賀城市でレンゲまつりを開催した時は当会理事の室岡義勝先生(大阪大学大学院工学研究科教授、当時。現、同大学院名誉教授・現、広島工業大学教授)から北海道十勝農協農産化学研究所で培養販売している「れんげ用根粒菌まめぞう」の素を土中から分離したことをお聞きしましたが、日本各地の根粒菌系統は一つにまとめられ中国ものとは異なるということです。薬学博士の木村久吉名誉会長(元金沢大学薬学部助教授)の話では、南京農業大学農学部ロウ助教授が来日された際に中国と日本の根粒菌形態(土中)が異なることを話しておられたそうです。また当会理事の田知本正夫先生(石川県立大学附属生物資源工学研究所常勤講師)からは根粒菌の写真と日本初の顕微鏡写真を提供していただきホームページに掲載してあります。

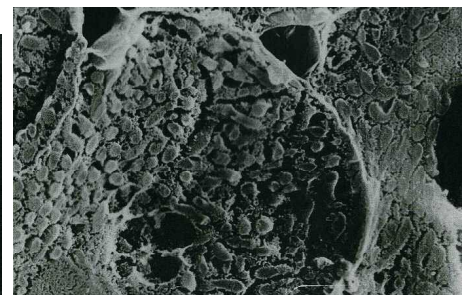
農業政策の大転換、国と自治体の財政状態を考えると生産緑地を守り続ける活動は、地域に生活する全ての方々との協力提携が大切ではないかと思います。その意味でも、皆様方の活動は、未来に豊かな大地を残す貴重な活動です。来年、府中のレンゲ田でお会いできることを楽しみにしています。(『レンゲ全書』安江多輔編著・(社)農山漁村文化協会刊から一部引用)



レンゲの根と
根粒



レンゲの根粒 黒い穴は液胞です



根粒間のバクテロイド 世界でただ1枚です

← 切るとヘモグロビンの赤い色が見えたら活性根粒です

<根粒菌顕微鏡撮影者>

石川県立大学 附属生物資源工学研究所
環境生物工学研究室 田知本正夫氏

3点の画像は日本レンゲの会のサイトより掲載させていただきました

国立衛生研移転先決まる 府中基地跡地

府中基地跡地利用問題（その3）

府中基地跡地利用問題については、「NPO法人府中かんきょう市民の会」は平成14年6月に府中市長宛、「緑地空間」として長期的展望にたって今後の都市計画、まちづくりの一環として、市民との対話を重視して計画づくりをするよう要望してきました。（本誌2005年秋号／10月12日発行、2006夏号／7月12日発行参照）

この中で特に「国立医薬品食品衛生研究所（以下、国立衛生研）の移転問題に触れ、平成14年8月に建物の規模、高さを初め、研究内容、バイオ施設（病原体、遺伝子組み替えなどを行う施設）がもたらす安全面の問題点などについて情報公開と住民説明会の開催要望を行った経緯があります。

衛生研、2回目の住民説明会開催！

2回目の住民説明会は平成20年3月22・23・24日の3日間生涯学習センターで開催、のべ210名の住民が参加して活発な質疑が行われました。説明会には衛生研側幹部が「移転計画の概要と移転予定地や今後の予定」等について説明を行いました。

【主な説明内容】

1 衛生研の概要

概要については研究業務、移転の背景、移転計画などで前回とはほぼ同じ内容で資料も同じものが配付された。

2 移転予定地及び景観イメージ

移転予定地については衛生研、公園、住宅用地などが描かれた“区割り”地図が公表されたほか、建物の小金井街道側と浅間山からの眺望イメージ図が配付された。移転予定地は小金井街道沿いで中央付近に立地し、敷地面積は約5.5㍍、建物の延べ床面積は47,000㎡で、高さは約25mとなっている。

3 測量、地質・土壌調査、生態系調査の概要

今回の説明会の中心は、この調査を行うためのものであり、次のような調査が行われる。

①測量調査は移転予定地の区割り及び面積の確定や敷地の高低などの現状把握のために測量機器により約1カ月程度実施。

②地質・土壌調査は土質の状態と地盤の強さを調査し、地盤が建物を安全に支えることができるか、その方法などを調査する。（調査期間は約3カ月）

③土壌調査は「東京都の安全確保条例」に基づいた調査で有害ガスや重金属等の有害物質の有無を調査する。（調査期間は約6カ月）

④生態系調査は法的規制対象外だが自然環境保全の観点から植物、樹木、微生物、動物等について実態把握のための自主調査を行う。（これは当会が強く要望したもの）

4 今後の衛生研側の予定

①平成20年度・・・測量、地質・土壌調査、生態系調査および廃屋の解体工事・・・調査開始前に事前説明会を開催予定

②平成21年度・・・衛生研の建物や施設の設計（予定）

③平成23年度・・・衛生研の建物や施設の建築（予定）

④平成25年度・・・移転（予定）

【市民との質疑応答】

今回の2回目の住民説明会では、市民から概ね次の質問がなされた。

1) 施設の安全性は100%安全か？

P3レベル（炭疽菌、結核菌、腸チフス菌等の病原体）の研究も行われると聞くと、住民としては迷惑施設であり住民の意見を聞かずに計画が進められている。府中市とどのように協議してきたのか。

2) 市と安全協定を締結して欲しい。市民推薦の専門家を入れて協定の内容を十分吟味し、形式的な安全協定にならないように配慮して欲しい。

3) 米軍施設の隣に建設されるP3施設となるとテロ攻撃の目標にされる危険性があり断じて認められない。

4) 大規模災害が発生した場合の対応、特に国民保護計画との関連をどのように考えているのか。

5) 今回の各種調査に当たっては事前に住民に知らせるとともに調査結果についても公表して欲しい。

〔衛生研側〕これらの質問に対して衛生研側は、施設は安全であり、心配するような事はないとの説明が繰り返された。さらに“同様な施設は全国に62カ所もあり、過去に事故が発生したことはない”との回答がなされた。



住民説明会での課題

○ 3月の住民説明会で市民から提案、要望を受け、市および国立衛生研が如何に対応するか注意深く見守っていく必要がある。特に説明会が、これからもたびたび開催されることを強く要望したい。

○ 安全協定の締結に市民が十分関与していけるか、自然環境調査をどれだけ事前に実施できるか等について引き続き要望していく必要がある。

○ 施設の設計図案ができた時点で市民に公表して、樹林を残した景観がどれだけ配慮されているか確認する必要がある。

○ 近隣住民とのかかわりについては「衛生研問題を考える会」が発足して学識経験者を交えて取り組みが開始された。当会としては、この会の動きも注視してゆきたい。

今後に向けて

2回目の国立衛生研の住民説明会でようやく住民の問題

意識が新たになり、これから本質的な動きが期待できる環境となった。

今回も府中市の対応は全く見えず、住民に対して市としての説明は無かった。会場から冒頭“市は住民に対して説明責任を果たしていない”との意見があり、会場から“同感”の拍手が起こった。このため開会が15分も遅れたほどであった。

平成20年6月までに、市は基地跡地の利用計画を国に提出する事になっており、市長が公約した「緑地空間としての公園計画づくり」が本格的に開始されるか注意深く見守っていく必要がある。(市政への提言活動委員会)

田んぼの学校2008 初めての代かき体験



「トンボ」で代かきに挑戦する子どもたち

田んぼの学校2008の第1回目として「代かき」を行いました(5月31日)。代かきは田植え前の準備として田おこしに続く大事な農作業です。田おこし後、水を張ってから田んぼの土を混ぜると、粒の大きい順に沈んでいきます。表面が一番こまかい土が隙間なく覆われ、田んぼの水が底抜け、即ち、漏れにくくなり、水の節約になるほか太陽熱で水温が上がり、イネが生育しやすくなります。また、土を平らにして、水の深さを均等にしたり、土を柔らかくすることで、イネの根を伸びやすくします。要するに田植えしやすい条件整備といえます。

農工大スタッフによる事前レクチャーではペットボトルに土と水を入れ、時間が経つにつれ、土の粗いものから細かい順に沈んでいく様子がわかるように見せてくれました。

当日は雨模様となり、参加者数が少ないのではと心配したのですが、泥んこ遊びの呼びかけが効いたのか、生徒、保護者とスタッフら合わせて40名が雨具を着用して代かきにチャレンジしました。最初はおそるおそるでしたが、慣れてくると、トンボという農具を使う手さばきもうまくなり、楽しんで作業していました。田おこしで浮いた草拾いもしました。これは浮いた草でも根付いて、イネの生長の邪魔となり取り除く作業でした。今年は昨年より、面積が3倍の広さになり、

後半には田んぼを駆け回り、泥を投げあつたりと楽しんでいました。

また、代かき後の生き物の発生についても学びました。代かき後には植物プランクトンが大発生します。するとプランクトンを食べるミジンコが出てきます。ミジンコは魚、ヤゴ、イモリなどの大きな動物のエサとなります。このように田んぼの土と水があることで、大小さまざまな動物が集まることがわかります。田んぼの自然循環を理解してもらうため、顕微鏡を用意し、ミジンコの観察も行いました。ドロドロした田んぼに入れる機会は田植えのみでしたが代かきは今までの農作業と一味ちがう体験として記憶されたと思います。

(進藤礼治郎)

はじめてのしろかき

府中第三小学校3年 ひが もえり

わたくしは、はじめて田んぼにはいって、しろかきをしました。トンボというどうぐで、たいらにしました。田んぼの土はぐちょぐちょでした。ふつうにあるいた土より、きもちよかったです。土のなかに足がはまって楽しかったです。

つぎのたうえはまた、土にはいれるし、なえをうえたり、バケツなえをもらうのが楽しみです。あと、生き物をさがしたりするのが楽しみです。

今、社会科でお米のことを学習しています

府中第一小学校5年 佐藤 結

しろかきをする時、はだしでやると思ったけど、くつ下でやりました。くつ下が白だったので、まっ黒になりあらっても茶色にしかならなかったです。その日、雨がふっていたので、すこしだけ田んぼが冷たかったです。カエルやツバメにあえてよかったです。カモもいたし、帰る前に小さなエビも見つけました。今度どんな生き物に会えるかな。今、学校で社会科でお米のことを学習しています。今まで、あまり田んぼを見ていなかったのでどんなふうに、お米ができるか、楽しみです。

次世代校舎として生まれ変わった府中第三中学校

2008年4月4日、府中・生活者ネットワークが呼びかけ、幼児、車椅子の方、年配の方等、16名が様々な視点から見学した。

第三中学校(本町4丁目／浅沼賢一校長)は築45年の旧校舎を改築し、2年かけて新校舎がお目見えした(改築費約21億円)。前面南向き、吹き抜け廊下で1階から3階までが見通せる。コンクリート肌のままの壁。とにかく東西に長い校舎で、全長126m。階段は、東西両端と中央の3カ所にある。校内が見える窓付きエレベータ・通常は、健常生徒の利用はしないこととしている。

緊急避難時の市民利用にも対応

一見して私は、バリアフリー化されたこの学校は、高齢者施設としても十分活用できると思った。緊急避難時などには、教室内に介護用ベットが置けるほど間口も十分に広い。

1階には「だれでもトイレ」がある。便器、手洗いの他、周囲には手すりがあり、簡易ベット、オストメイト用流しもある。ほかには事務室・職員室・職員トイレ・保健室・図書室・特別教室2種・PC室・給食配膳室がある。これまでとの違いは図書室が1階にあり、本は手に取りやすく、室内は明るい。

2階から体育館への渡り廊下がある。3年のHR、特別教室7室、水屋つきの茶室がある。普通教室の広さは、これまでは7×9mだったが、9×10mと広い。黒板が上下可動式で後の生徒にも見えるよう配慮されている。3年前からできた情緒障がい通級学級には約20名が通う。職員室も含め3室使用、シャワー室もあり、汚れを落とせる場があることは生徒たちにとってとても安心だろう。トイレは、東側と西側にそれぞれ和洋式がある。床は乾式で基本的には生徒が清掃する。

3階は1～2年のHRがある。北側には屋上緑化を目的に、植栽プランターがあったが、まだ生徒たちが手を入れ

た「緑」ではなかった。北側からは光が入り、1階部分まで明るい。夏までに「緑のカーテン」などを這わせると光熱費が節約できそうだ。

太陽光発電など環境配慮も

このほか環境面では、太陽光発電パネルが設置(1,500万円)され、発電量は1時間当たり10KW。6教室の1時間分の使用量が供給できるという。1階の生徒昇降口脇には現在の発電量がわかる表示板がある。ほかに太陽光発電パネルと風力発電を利用した東門の外灯が灯る。雨水利用においては、雨水貯留槽が埋められ、ろ過した雨水をトイレの洗浄水や屋上緑化の散水に使用できる。雨水浸透ます、校舎周囲には浸透性ブロックも利用されている。体育館南側には約300㎡の芝生スペースがある。このように市内唯一の「エコスクール」の役割として、第三中はモデルとなり、これから担う子どもたちが体感できる学校であってほしいと願う。

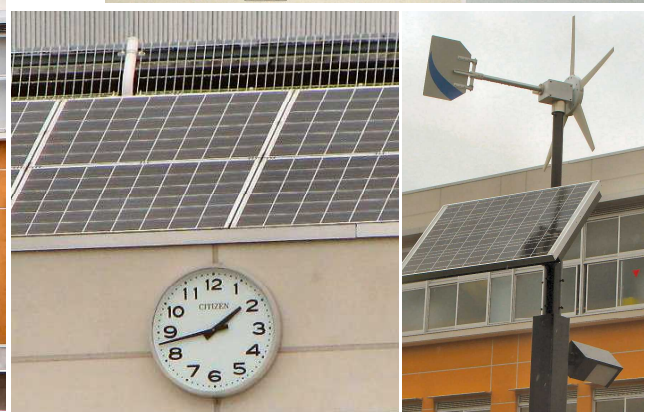
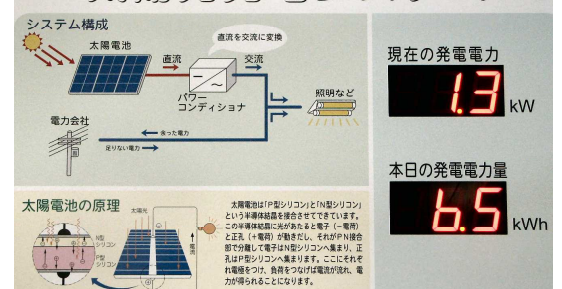
府中市環境基本行動計画にも示されているとおり、あらゆる場所で、限られた資源を有効利用するために、太陽光熱・雨水利用。CO2を削減するためにも緑を増やすことを進める必要がある。企業ももっともっと努力するべきだ。

府中市では、今年度、学校の耐震化をさらに進めるために、約11億2千万円支出予定。今年度末までに耐震化が終了するのは6小学校・4中学校で、引き続き耐震化工事を優先すべきだ。

「次世代校舎」、そして福祉や環境に配慮した公共施設はどうあるべきか、さらに考えていく必要がある。

(浅田 多津子)

太陽光発電システム



生徒靴脱ぎ場に設置されている太陽光発電表示板(上)、発電パネルは校名版の右に56枚が並ぶ(左)、その部分拡大写真(中)生徒登校門の門灯は風力と太陽光の組み合わせ(右)

河原に咲く花の観察会



スタート～小さな仲間も～

「OOM子サン」、「ハイ」。「〇〇Fクン」、「イルヨッ」。

「今日は、このオジサンと一緒に河原を歩きマース。オジサンより遅れないように!」、「ワカッタ!」。

こうして、市民参加者19名の最後尾から、オジサンは、恰好の仲間二人と中河原駅を出発しました。9時半予定通りの時刻でした。

途中、中河原公園で、講師の先生に「府中多摩川河川敷の植物一覧」という資料を貰って、外来生物の説明をうけました。小さな仲間達は、少し退屈そう。

「M子ちゃんは、大きくなったら何になりたいの?」、「ワタシネ、植物学者になりたいの」。

「エエッ! そう! 植物学者になりたいのか!」。オジサンは、途端に元気が出てきました。(こうなりやもう、大人のことは知らねえ。)

「Fクン、キミは何になりたいの?」、「ワカンネエや!」。オジサンにはこれも良い返事。(そう、キミはそれでいい。)

河原に出ました～いろいろな花そして風～

天気が心配された今日の観察会。午前中は何とかもちそうです。思い切って決行して良かった。

と、「オーイF! 何処へ行くんだ!」と、Fクンのお父さんの声。

Fクンは、関戸橋脇の急な下りを、チョコチョコと、転びそうに下って前へ前へ。大人たちを尻目に駆けて行くその先に、オオキンケイギクの花が、風に揺れていました。

(そうか、Fクンは風のF坊だ!)

「これ、オオキンケイギクって云うの、きれいね」。未来の植物学者は嬉しそう。(そうだ、先ず感動してくれればそれでいい)

「でもねM子ちゃん。この花は、特定外来生物といって、お庭に植えてはいけないんだヨ」。「どうして?」、「こ

の植物は、どんどん増えて、ほかの植物の居場所を取り上げてしまうからなんだ。」

突然、風のF坊が手を引っ張る。「Fちゃん何処へ行く!」風のF坊は、蝶々が飛んでる方に走る。そうか、蝶々か。

風のF坊は、その蝶を採るでもなく、また別の蝶へと走る。

「そっちは草が深いからダメダー」。(でもオジサンも、風のF坊にもどりたいナー。)

多い外来生物～でも何時から?～

進むほどに、色々な花が咲いています。ニワゼキショウ、マメグンバイナズナ、アカツメクサ、ハルジオン……。でも、これ全部外来生物。

「みんな、よその国から来たのね。どうしてこんなに多いのですか?」。(オジサン、ちょっと答えに困る。)

「お庭に植えてた外国の花の種が飛んだり、外国からの荷物に付いてた種が落ちたりして、段々増えてきて、それが水に流されながら、河原でまた増え続けたんだ」。

汗を拭き拭き、オジサンは答えました。

(でも、大人達は、この植物群の様相をどう思うのでしょうか。今回も、黙々と写真を撮る人が目立ちました。)

因みに、講師に提示された植物140種のうちの40%56種が外来種です。シヨカツサイ、ムシトリナデシコ等は、江戸時代に渡来したもの。ハルジオン、キショウブ、などは、明治・大正の頃に観賞用に輸入したものです。

草の名と子供～スカンポは酸っぱい～

面白い名の植物が出てきました。ミノボロです。これは今の大人にはもう馴染みの無い名かもしれません。蓑(みの)檻樓(ぼろ)と言えど・・・そう、この花を見て「ぼろ蓑」だと笑いものにしたのは、子供達でした。

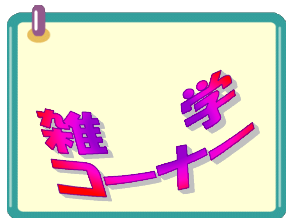
「M子ちゃん、ここ触って」。ムシトリナデシコの茎を触らせる。「ベトベトするね」。「そう、ここに虫がくっついて動けなくなるから、虫取り撫子って云うんだ」。「そうか。へえー、面白いな」。(未来の植物学者が喜んでるゾ。)

昔、子供は自然と一体で遊んでいました。そして勝手に草に名付けていたのです。(柳田國男著「草の名と子供」昭14)。今回の観察会では出ませんでしたが、カヤツリグサの茎の匂いに、遠い懐かしさを感じる人は多い筈です。これも子供達が付けた草の名でした。

「これ噛んで見て。」「ファッ! 酸っぱい!」「これ、スイバって云うんだ。酸っぱいからスイバだ。スカンポとも云うよ」。

「10円玉がピカピカになるよ。」「ほんとだ」。

こうして、小さな植物学者とオジサンの時間は終わりました。風のF坊は、汗びっしょりで、早や眠そうでありました。大人達も、満足そうに解散して行きました。(杵島弘通)



夢広がる “畑の学校” 始まる

都市における農地・農業景観の重要性は、食糧自給、地球環境問題の視点からも広く市民が認識しており、東京都は『新たな可能性を切り拓く東京農業の挑戦・・・東京農業振興プラン』（平成14年3月）や、府中市では『府中市農業振興計画』（平成17年8月）を定めて農地・農業を保全・活用する諸施策を講じています。

農業者の高齢化、担い手不足対策の1つとして市民参加型農業を推進・支援しているのですが、当会も数年来“援農ボランティア”活動を続け、現在は16名が参加して支援農家から熱心なボランティアとして、大変喜ばれています。当会ボランティア活動の評価が高まり、更に希望農家が増える見通しです。

昨年来、当会が運営できる農地を求めているところ、援農農家からの耕作依頼があり、援農ボランティアの一環として引き受けることとしました。同じ市民参加型農業の“市民農園”、農業体験農園とは異なり、ごみ減量や省エネを配慮した、かんきょう市民の会が主催する学校を意識した次の基本方針を掲げて、会員以外の一般市民にも呼びかけてスタートしました。

- ① 集団農場（共同耕作）方式とする。
- ② 循環型農業を目指す
（生ゴミ、落ち葉を活用し堆肥を作る、雨水も利用）。
- ③ 旬の作物を、播種から収穫まで体験・学習する。
- ④ 収穫物はみんなで分ける。
- ⑤ 農業資機材は当面持ち寄り。



残念ながら雨となった「畑の学校開校式」

畑は押立町2丁目の農地約150坪、授業料年1,000円、登校日は第1,3日曜日、第2,4木曜日の11:00-12:00のいずれかまたは双方。とにかく、ワイワイ・ガヤガヤ農園仲間（ファーム・メイト）として楽しく体験学習しようと始めました。開校式は20名（現在は22名のファームメイト）が参加したが、雨中で予定していた必須作物の播種も出来ず、運営方針の説明と自己紹介で終わりました。その後、8回の登校日を重ね、自分のすべきこと、学校の運営細則も理解され、各区画に作物が植えられ生育しています。（写真下、6月1日現在）

圃場は8区画に分け、夫々必須作物（区画Ⅰキュウリ、Ⅱカボチャ、Ⅲシュンギク、Ⅳ自由作付け、Ⅴナス、Ⅵミニトマト、Ⅶトウガラシ、シシトウ、Ⅷ育苗区）を定め、責任者がいて、栽培日誌を記録し、選択作物の選定や栽培管理をする。年間の必須作物の作付け計画、各種作物の育苗を担当し、苗を提供する業務であるが、思うように発芽しなかったり、発芽しても生育が思わしくないなどの試

行錯誤も…。しかし、生育のバラつきや遅れなどありましたが、一面に作付けが終えることが出来、今後、どんな収穫物ができるのか次に何を植えるのかの期待も広がるばかりになりました。

これから梅雨シーズン、次いで猛暑の到来、これらを乗り越える逞しい作物群に恵まれています。スイカやマクワウリを現地で賞味できる日を夢見て、栽培管理に精進します。

（竹田勇／畑の学校、自称校長）



8区画で旬の作物が生育し始めた